



オーケストラをDriveするな Carryしろ!

SAM日本チャプター理事・広島支部長
(株)ロジタント 代表取締役

吉田 祐 起



表題は、かの世界的に著名な管弦楽指揮者ヘルベルト・フォン・カラヤン（故人）の言葉です。本誌 Spring, 2006号の拙著寄稿文で書いたケインズ著の一節（how to doよりもhow to beがもっと大事）に符合する言葉と受け止めています。実は、この言葉はカラヤンの最後の愛弟子であり、正式な彼の「スタンバイ指揮者」でもあったオーケストラ指揮者・山下一史という私の甥がカラヤン生誕100周年・没20年を記念して出版された「音楽現代5月号」（芸術現代社刊）への寄稿文「大きな宝箱を一生かけて開いていきたい」に書いているものです。「指揮者がオーケストラの奏者の音楽的意思を尊重する事なしに、指揮者の一方的な意思でドライブ（無理強い）するのではなく、奏者の意思を尊重しながら、その能動的な力を最大限に発揮させて、結果的に指揮者の意思を実現する。」というのが筆者山下の解釈です。

叔父の立場で恐縮ですが、その甥・山下一史の業績の一端を紹介します。彼は1986年、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の演奏会で、急病のカラヤンの代役として急遽、ジーパン姿のまま「第九」を指揮し、大きな写真記事とともに話題となりました。私の地元広島では、年末恒例の「第九ひろしま」を今年末で3年連続の指揮になります。ちなみに、その甥は私の4歳上の姉がドクターストップにも関わらず、自身の生命を賭して、あたかも神さまの導きに従って、といった気持で生んだ一人っ子です。原爆症とその手術で生命の危険を何度も彷徨いながらも、満80歳で存命している彼女です。広島市の原爆記念館に彼女の「脱毛した髪の毛」が展示されています。その一人っ子の山下一史はあたかも何かを託されてこの世に生を受けて活動している人物と思われれます。

トラックドライバー研修や、(社)広島県安全運転管理協議会の法定講習専任講師活動でも強調しているのがこの「how to do⇒how to drive well よりもhow to be⇒how to be a good driverが大事」とする提言。すべての職業人に通じる処世哲学として提唱する私ですが、この「ドライブするな、キャリーしろ」は極めて類似する理念として早速に提言活動に導入しています。とりわけ、drive（運転）とcarry（運ぶ）は運送企業労使に直結する言葉です。荷主の貴重な貨物を積載した「トラックをdriveする」のではなく、「荷主さんの心とその貨物の役割をcarryするのだ」と。「心を運ぶ」という心掛けです。

先日、小学校時代の同窓会で東京からわざわざ広島に来てくれた友があります。キリスト教会の牧師人生で定年を迎えた四竈揚という人物。二人きりの二次会で語り合いました。牧師として「特愛の聖句」を尋ねました。彼自身が被爆後生かされていることから、旧約聖書詩篇118編17節「死ぬことなく、生きながらえて主の御業を語り伝えよう」だ、と即座に答えてくれました。彼はこれから時折、他教会に招かれて説教する立場とか。喜寿を迎える二人共々、人の心を動かす業の仕掛け人、「後期高齢者」ならではの働きを目指そう、と語り合いました。かくいう私は、人生四毛作と位置付ける英語による「原爆語り部役」を米国で演じる助走として、広島大学履修生として本格的な英語学習を開始したところです。「生かされ 活かされていることを 感謝しつつ」を胸に、日々精一杯に生きていきたいと願っています。